

和歌山で感じたこと

王 佳寧
教育学部 交換留学生 中国

和歌山というところはどんなところだろうか。実は、日本に来る前、和歌山について全然わからなかった。和歌山は一体どういうところなのか、好奇心を持って和歌山大学での留学が始まった。

桜が満開の頃、私は和歌山に来た。あっという間に、留学生活はもう四ヶ月になった。その四ヶ月を振り返ってみると、まるで昨日のことのようだ。初めての留学だったので、期待とともに不安もあった。国の家族や親友と離れる苦しみや、ひとり暮らしの寂しさや、日本人と話すとき、言葉が通じないことでいろいろ大変であった。

幸い、和歌山の人々はみんな親切で世話好きだ。和歌山に到着した日に、大学の国際交流センターの先生たちは駅で私たちを迎えにくれて本当に感動した。国際交流会館の外国の友達や先輩たちにいろいろ助けてもらったおかげで、悩みはだんだんなくなってきた。

この四ヶ月の生活で、和歌山での様々な人々に接して、少し感想を持った。

まず、日本人の礼儀正しさだ。日本人はいつも礼儀正しいと言われている。和歌山に着いた日から、ずっと和歌山での人々のマナーの良さを感じている。日本に来たばかりの時、在留カード、国民健康保険、銀行口座、携帯電話などいろいろな手続きがあった。手続きをするとき、いつでもどこでもみんなずっと笑顔で丁寧に説明してくれた。私もいつも笑顔で応じて、終わった頃には顔が疲れた。また、わからないことがあったら、絶対嫌な顔をせず、理解できるまでゆっくり教えてくれた。日本事情の授業で、紀陽銀行の会社員から「いつもお客様の立場から考え、一番いいサービスを提供することをモットーに努力している。」という言葉聞いた、さすがサービスが一番の国だと思う。もし毎日笑顔を浮かべて生活できたら、世界も明るくなるだろう。

また、和歌山には留学生を支援する組織がたくさんある。ボランティアはどこにもいるように感じる。あ



るボランティアは、主婦とか、定年退職した人とか、会社員とか様々な分野の人たちだ。みんなは利益のためではなく、ただ社会のために自分のできる限りの力を尽くしている人達だ。ボランティアの活動を通じて、自分の生き甲斐が感じているのだろう。私のボランティア先生は今もうすぐ70歳になり、自分のお爺さんみたいな年齢だ。毎週会館に来てくださり、私と一緒に日本語で話し合ったり、和歌山の歴史を勉強したりしている。ボランティア先生の活動は自分の日本語レベルの向上に非常に役に立っていると思う。

また、祭りでは、和歌山の人々はみんな積極的に参加していた。平日真剣に仕事に取り組んでいる人々は、お祭りの時には気持ちを入れ替えるのだろう。子供からお年寄りまで、伝統的な服装を着て、みんな元気いっぱいにお祭りを楽しんでいた。



留学したからには、勉強だけでなく、国と国との理解を深めることも大切だと思う。違う生活習慣や伝統文化を理解し合わなければ、国と国の摩擦の解消と平和は訪れないと強く感じてきた。留学生である私は、中日のあいだの友好の架け橋となって、文化使節としての使命感を持ちながら前に向か

って頑張らなければならない。

和歌山に留学して本当に良かったと思う。東京や大阪みたいなうるさい町ではなく、静かな和歌山で人生を考えながら、残りの留学生活を楽しんで行きたい。